九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

養育者および保育者における子どもの問題行動の捉え方と養育者の育児負担感の関連

平田, 祐太朗
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/20079

出版情報：九州大学心理学研究. 12, pp.79-85, 2011-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2011, Vol.12, 79-85

養育者および保育者における子どもの問題行動の捉え方と養育者の育児負担感の関連

平田祐太朗　九州大学大学院人間環境学府

Parenting stress and the cognitions of children's problem behaviors by parents and teachers

Yutaro Hirata（*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*）

The relationships between cognitions of parents regarding problem behaviors of children and parenting stress, cognitions of teachers regarding the same and parenting stress, as well as parents' cognitions about problem behaviors and teachers' stress were investigated. Participants were 54 parents with kindergarten-aged children and their 4 teachers. Questionnaires for parents inquired about children's problem behaviors and parenting stress, and those for teachers inquired children externalizing their problems. Results indicated that parents recognized the externalizing of problems and parent had significantly more parenting stress, as well as significantly more cognition of refusing the emotions of their children. Moreover, teachers recognized the externalizing of problems and parent had significantly more parenting stress and significant more cognitions of refusing the emotion for their children. In addition evaluations of externalizing problem behaviors by parents and teachers were significantly correlated. Moreover, parents tended to evaluate externalizing problem behaviors more often than did the teachers. In conclusion, this study identified behavioral traits of children that influence parenting stress, as well as differences between parents' and teacher's cognitions about children's problem behaviors.

Key Words: parenting stress, cognition of problem behavior, externalizing problem behavior

Ⅰ．問題と目的

養育者は子どもを育てることによって自分自身が成長していくが，同時にその過程でさまざまな不安やストレスに直面する。同じ子育てであっても，それをストレスと感じる人，楽しんで行う人，成長の機会と捉える人等さまざまである。この違いを説明する一つの理論にLazarus & Folkman（1984）らの「ストレス認知理論」がある。これによると，育児で起こるさまざまな出来事は，母親にとってのストレス症状を引き起こす潜在的ストレッサーと位置づけられ，「潜在的ストレッサー」そのものに比して，潜在的ストレッサーに対するネガティブな認知評価，すなわち負担感（burden あるいは strain）が個々人の心理的および身体的ストレス症状とより密接に関係することが指摘されている。この点から考えたときに，子育てにおいて養育者が子育てや，子どもの行動，その際に自身の感情についてどのように捉えているかについて知ることは，ストレス症状と潜在的ストレッサー，負担感を整理する上で有用であり，支援を考えていく上で必要であることが考えられる。実際に，育児負担感に関する研究は，育児負担感尺度の開発（中嶋，1999）や育児負担感とソーシャルサポートについて論じられてきている（金岡・藤田，2002）。

近年の育児負担感に関する研究においては，育児ストレスと育児負担感を整理し，まずLazarusによる「ストレス認知理論」により統一的に説明しようという流れが一般的である（種子田ら，2004；斉藤　2000；中嶋ら，1999）。本邦における「育児ストレス」における尺度においては構成概念の整理が十分ではなく，このことが専門家による介入効果の検証を困難にしていると指摘されている（斉藤，2000）。Lazarusによる「ストレス認知理論」以来，潜在的ストレッサーならびにネガティブなストレス認知評価であるストレイン（負担感）と，心身のストレス症状の概念の区別ははっきりとしており，ストレイン（負担感）についてはストレッサーと心身のストレス症状を媒介し，ストレス症状の発現と密接な関連を有するものとして，尺度開発や関連要員の検討が進められている（斉藤，2000）。前述した，母親の潜在的ストレッサーに対するネガティブな認知評価に焦点をあてたものとして中島ら（1999）の開発した育児負担感尺度がある。これは，構成概念妥当性，基準関連妥当性ならびに信頼性が確認されている尺度である。また，育児負担感へ関連があるものとして，母親の就業状況，年齢，父との関係，ソーシャルサポート，といった母親をとりまく状況や，子どもの性別，年齢，気質など数多くの研究が行われている（斉藤，2000；種子田ら，2004 ほか）。

ところで，養育者にとってストレスフルな児の行動として問題行動が挙げられる。問題行動とは，「発達上な

いし，社会集団への適応上，問題となる行動（竹林，1999)」とされている。子どもの問題行動は，Achenbach＆Edelbrock（1978）による分類と評価尺度に関する分類以降，攻撃性と反社会性に代表される Externalizing な問題行動（以下，外在化問題行動と記す）と，不安や抑うつ・ひきこもりを中心とした Internalizing な問題行動(以下，内在化問題行動）に分類される。外在化問題行動には，攻撃性と反社会性のほか，反抗・挑戦性，過剰な活動性，注意の散漫性が挙げられる。彼らの開発した問題行動評定尺度（Children Behavior Checklist；以下CBCL，Achenbach＆Edelbrock，1983）は幼児期・児童期における問題行動の評価や教育的・臨床的な処遇の効果測定に関する数多くの研究で用いられている（Achenbach＆Edelbrock，1983)。本邦において，これらの問題行動尺度は金山（2006）らが翻訳した，保育者用の評定尺度がある。これは，簡便に用いることが可能で，スクリーニングとしてその有効性が確認されている（金山，2006)。子どもの問題行動を評定する方法は，自己評定法，保育者評定法，仲間評定法，行動観察が挙げられる。中台（2002）によると子どもの問題行動を社会的行動と捉えるならば，その社会的行動は場面に特有のものと考えられ，園と家庭で子どもが見せる姿は異なる可能性が考えられる。そのため，子どもの問題行動はより多角的に捉えられる必要があり，家庭での子どもの世話を担う養育者や，子供にとって最も身近な社会である保育園・幼稚園の教諭・保育者それぞれの立場からの評定を行うことは意義があると考えられる。実際に中台ら(2002）は園と家庭での子どもの問題行動の関連を探索的に調査した結果，問題行動に関連性が見られ，とりわけ外在化問題行動においては両場面において同じように示されることが示唆された。だが，この研究は，外在化問題行動全体の相関関係を求めたものであり，具体的にどのような行動に関連があり，また評定が異なるのかは明らかにされていない。前述したとおり，社会的場面や評定者が異なることを考えると，行動の特徴によってはその評定間に違いがでる可能性が考えられる。

また，子育てにおいて母親を悩ませる要因と考えられる子どもの行動特性の中でも，問題行動という側面に着目した際，種子田ら（2004）の研究によると，子どもの問題行動が母親の育児負担感におよぼす影響の程度は寄与率で 31.0%であった。また，子どもの行動特性のうち，乳幼児の「注意の持続性と敏感さ」「周期の規則性」「フラストレーショントレランス」という特性が親のストレスと関係があることもわかっている（谷向，1999)。これまで，子どもの行動が母親の育児負担感に与える影響についてはさまざまな研究がおこなわれてきた（斉藤，2000；種子田ら，2004)。子どもの問題行動と育児負担感の関連についての研究では，母親の定性的な評定が困難であることが指摘され（斉藤，2000)，クラス担任保育士による評定がなされてきている。しかし母親の育児ストレスは，ストレス反応を媒介とするストレスインの存在を仮定することができる。そのため母親が子どもの行動をどのように捉えているかと育児負担感の関連を調べることは，意義があること考える。また，養育者・保育者両者からの行動評定と母親の育児負担感に関して調べた研究は見当たらない。

富田（2010）によると保育者は，保育者と保護者とのコミュニケーションに課題があると考えている。吉川(2008）によると，保育者の抱える困難感の中で最も大きいものは「保護者との関わり」であり，その内容として「コミュニケーション」「連携・協力」「子育て感の理解」などであった。一方保護者は実際に学校への関わりと関わりたい気持ちとの間に矛盾があることが指摘されている（Eccles＆Harold，1993)。このことより養育者にとって保育者との関わりが，子育てにおける負担感に大きな影響を与えることが推察される。特に問題行動といった双方を悩ませ，触れにくい話題におけるやりとりはより負担感に強く影響を与える可能性が考えられる。保育現場における養育者と保育者の支援を有効にしていくために，養育者と保育者の問題行動の捉え方が実際にどのように養育者の育児負担感に影響をしているのか，研究することは意味があると考えられる。

よって本研究の目的は，①養育者の育児負担感と養育者の子どもの問題行動の捉え方の関連を検証する，②養育者の育児負担感と保育者の子どもの問題行動の捉え方との関連を検討する，③養育者，保育者の外在化問題行動の捉え方と育児負担感との関連を検討すること，とする。

Ⅱ．方　法

1．調査対象

1）保育園児（男児 29 名，女児 25 名）を持つ養育者 55 名（平均 33 歳，範囲 47〜26)，

2）上記保育園児担当保育者 4 名を対象とした。

2．調査期間

調査期間：2007 年 8 月〜9 月（2 週間〜3 週間)

3．調査内容

本調査では，上記養育者に対して①保育者評定問題行動尺度（金山ら，2006）外在化問題行動 8 項目（例：不注意である，多動である等)，内在化問題行動（例：さびしそうにしている，悲しそうであったり，ふさぎこんでいる等）5 項目を各 5 段階評定にて行った。②育児負担感尺度（中島ら，1999）を「自身の社会的役割活動に

関する制限の認知（以下；社会的活動の制限）」4 項目，「児に対する否定的感情の認知（以下；否定的感情の認知）」4 項目の計 8 項目を各 5 段階評定で行った。これらの項目に社会的望ましさを考慮して筆者がダミー項目を加えている。フェイスシートは母親の属性についての調査（年齢，子供の数，職業形態，世代構成）である。

また担当保育者に対して③金山ら（2006）の保育者評定尺度に，ダミー項目を加え，全 14 項目として行動評定を行った。保育者には保育者の負担と実施上の都合上，外在化問題行動尺度 4 項目＋ダミー項目全 14 項目のみ行った。

4. 調査手続き

養育者に上記の尺度を含む質問紙を保育者より配布してもらい（対応番号をうつ），また児の担当の保育者にも保育者評定尺度を用いて評定してもらう。無記名で行い，封をして手渡しで回収。保育者には担当する園児についての評定を直接依頼して，親には担当保育者から直接渡してもらった。

Ⅲ．結　　果

1. 養育者の属性・問題行動と育児負担感

(1) 母親の属性と育児負担感の関連

母親の年齢，子どもの人数，子どもの性別，子どもの出生順位の基本統計量を Table 1 に示す。母親の属性と育児負担感との関連を調べるため，Peason の積率相関分析を行った。その結果，「子どもの人数」と「育児負担感」との間に有意な正の相関が見られた（r＝.37，p<.01）。また，下位尺度では「社会的活動の制限」と子どもの人数の間に中程度の相関がみられた（r＝.38，p<.01）。養育者の年齢と子どもの性別による差は見られなかった。このことより，子どもの人数が多いことは，物理的に母親の時間と活動をとることになり，母親の社会的な活動が制限されているように母親が感じやすい可能性が示唆された。また，母親の年齢と性別での育児負担感との関連は見られなかった。

(2) 養育者の問題行動評定と育児負担感との関連

養育者が子どもの問題行動をどう捉えているかの指標である問題行動評定に関する分析を行った。「外在化問題行動尺度（8 項目）」の平均値は 17，標準偏差は 4.1 となった。「内在化問題行動尺度（5 項目）」の平均値は 9.3，標準偏差は 2 となった。また，「問題行動総点」は外在化問題行動得点と内在化問題行動得点を合わせたもので，平均値が 26，標準偏差は 4.8 となった。

育児負担感尺度は「自身の社会的役割活動に関する制限感（4 項目）」の平均値が 11，標準偏差が 3.4 となった。「児に対する拒否的感情の認知（4 項目）」の平均値は 12，標準偏差は 3.2 となった。さらにこの 2 つの尺度の合計得点である育児負担感は平均値が 23，標準偏差は 5.8 となった。

次に育児負担感と問題行動のそれぞれの下位項目間の関連を調べるために Peason の積率相関分析を行った。54 名分のデータを対象に行った結果，「外在化問題行動評定」と「育児負担感」に低い有意な相関関係が見られ（r=.32，p<.05），「外在化問題行動評定」と下位項目「自身の社会的役割活動に関する制限感」（r=.27，p<.05），「外在化問題行動評定」と「児に対する拒否的感情）」（r=.29，p<.05）の間にそれぞれ有意な相関がみられた。また，「問題行動得点」の総点と「育児負担感」との間に，「拒否的感情の認知」，「育児負担感」それぞれに低い有意な相関関係が見られた。一方，「内在化問題行動評定」と「育児負担感」と下位項目の間には有意な相関関係は見られなかった。問題行動評定下位項目と育児負担感下位項目の相関係数を Table 2 に示す。

これらのことから，養育者が子どもの問題行動を高く評定する場合は特に拒否的な感情の認知，育児負担感と関連があることが推察され，特に外在化問題行動評定は，育児負担感，社会的活動の制限，拒否的感情の認知と関連していることがわかった。

次に養育者の外在化問題行動評定得点上位 25%を高群（n=14），下位 25%を低群（n=14）として，育児負担感に与える影響を調べるため，対応のない独立したサンプルの t 検定を行った。その結果，外在化問題行動得点高群と低群との間で，「育児負担感」に有意な差（t(25) =2.3，p<.05）が見られた。また，「拒否的感情の

Table 1
対象者の属性

母親の平均年齢	M=34（SD=4.7, range 26-47）
子どもの人数（平均）	2.4 人
対象児の性別	男児54%　女子46%
対象児の順位	第一子43%　第二子以下57%

Table 2
問題行動評定下位項目と育児負担感下位項目の相関係数

		問題行動評定		
		養育者外在化問題行動評定	養育者内在化問題行動評定	問題行動総点
育児負担感	社会的活動の制限	.27*		
	拒否的感情の認知	.29*		.27*
	育児負担感	.32*		.29*

＊有意のもののみ表示　*p＜.05

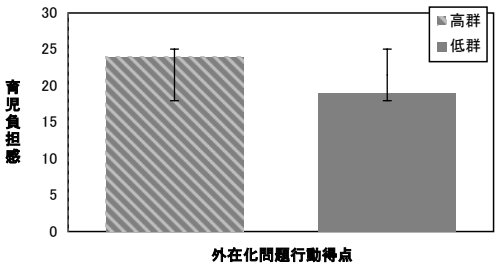

Fig.1 外在化問題行動評定高群低群と育児負担感得点

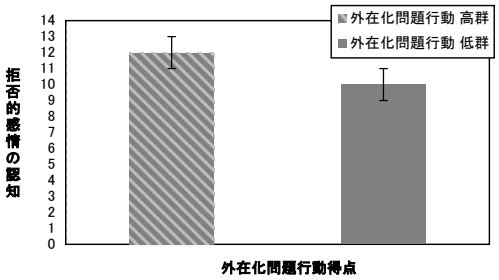

Fig.2 外在化問題行動評定高低群と拒否的感情の認知得点

認知」においても有意な差（t（25）=2.1，p<.05）が確認された。Fig.1 に結果を示す。

このことより，自身の子どもに対する外在化問題行動評定を高くする養育者は低く評定する養育者よりも育児負担感が高いことが示された。また，外在化問題行動評定高群においては，低群に比べて育児負担感の下位構成概念である「拒否的感情の認知」の得点が有意に高くなることが確認された。Fig.2 に結果を示す。

2. 保育者の外在化問題行動評定と育児負担感との関連

(1) 保育者の外在化問題行動評定と養育者の育児負担感との関連

保育者の外在化問題行動尺度得点 4 項目の平均値は 7.09，標準偏差は 2.37 となった。

外在化問題行動得点 25%水準で高群，低群に分けて，独立したサンプルの t 検定を行った。その結果，高群と低群の間に養育者の育児負担感の平均値に有意な差（t（25）=2.6，p<.05）が見られた。Table 3 にそれを示す。

3. 保育者と養育者の外在化問題行動の捉え方について

次に保育者と養育者の間の外在化問題行動の捉え方の関連を検討するために，保育者の項目数 4 に養育者の項目数を揃え，この 4 項目についての養育者の外在問問題行動の捉え方の基本統計量を算出した。その結果，平均値は 7.68，標準偏差は 2.4 となった。養育者の内在化問題行動尺度得点（5 項目）の平均値は 9.3，標準偏差は 2 となった。

Table 3
保育者外在化問題行動評定高低群と養育者の育児負担感平均値の比較

	高群（N=14）		低群（N=14）	
	M	SD	M	SD
育児負担感	24	5.7	19	4.8

養育者と保育者それぞれの外在化問題行動得点の関連を調べるために，54 名のデータを対象に Peason の積率相関係数を算出した。その結果保育者と養育者の得点に中程度の有意な相関が見られた（r=.41，p<.01）。

次に，より詳細に養育者と保育者の評定の関連を調べるために，外在化問題行動 4 項目を養育者と保育者それぞれで Peason の積率相関係数を行った。その結果，「攻撃的である」「多動である」「きまりや指示を守らない」の 3 項目で低い有意な相関関係が確認された。その結果を Table 4 に示す。

次に，外在化問題行動項目ごとの平均値と標準偏差を Table 5 に示す。養育者と保育者の平均値の差をそれぞれ対応のない独立したサンプルの t 検定を行った結果，有意な差が見られたものはなかった。統計的に有意な差はないものの，3 つの項目で養育者の評定が，保育者の評定より高く，「不注意である」の項目のみ保育者の評定が高い結果となった。

4. 保育者と養育者の外在化問題行動の捉え方の差異と育児負担感との関連について

養育者と保育者の評定得点を合わせた「養育者＋保育者」得点を算出し，その得点の上位 25%を高群，下位 25%を低群として，その育児負担感の平均値の差異を調べるために対応のない独立したサンプルによる t 検定を行った。その結果，高低群の平均値の間に，有意な（t（25）=2.0，p<.05）差が確認された。

Ⅳ．考　　察

1. 養育者の外在化問題行動評定と育児負担感との関連

養育者の属性と育児負担感の関連を調べた結果，子どもの数が多いことは子どもにかける時間・手間と物理的に養育者の手をとることとなり母親の社会的活動，主に働くことや自分の時間を持つ，といった活動を制限し，育児負担感を高める可能性が考えられる。また，外在化問題行動評定と育児負担感との関連より，子どもの行動について「落ち着きがない」「攻撃的である」「多動である」などと子どもを捉えている養育者は，育児に対して拒否的な感情を認知しやすく，負担感を抱きやすいこと

Table 4
外在化問題行動項目ごとの養育者・保育者間評定の相関係数

	攻撃的な行動	不注意である	多動である	きまりや指示を守らないことがある
養育者・保育者評定	.39**		.32*	.35**

Table 5
外在化問題行動項目ごと平均値と標準偏差

		平均値（*SD*）
攻撃的な行動である		
	養育者	1.7（0.4）
	保育者	1.5（0.7）
不注意である		
	養育者	1.8（0.9）
	保育者	2.1（0.7）
多動である		
	養育者	1.8（1.0）
	保育者	1.4（0.6）
きまりや指示を守らないことがある		
	養育者	2.1（0.7）
	保育者	1.9（0.7）

が示唆された。特に外在化問題行動は育児負担感，社会的活動の制限，児に対する拒否的感情の認知それぞれと関連があり，内在化問題行動は，育児負担感との関連は見られなかった。以上のことより，養育者が特に外在化された子どもの問題行動特性を捉えることは，養育者が子どもに対して拒否的感情を抱きやすく，養育者の育児負担感を高める可能性が示唆された。また，内在化問題行動「さびしそうにしている」「悲しそうであったりふさぎこんでいる」「他の子供たちといるときに不安そうである」といった行動特性は育児負担感と関連しないことが明らかになった。内在化問題行動はその行動特性から，養育者の不安を喚起するような行動ではあるが，そのことが子どもに対する拒否的感情や，活動の制限といった育児に対する負担感とはつながらないということが考えられる。

これまでの先行研究では保育者による評定と養育者の育児負担感との間の関連を見た調査であった。一方，本研究では養育者が捉えた子どもの問題行動が養育者にとってストレッサーとなり，育児負担感を高めるということを明らかにした。しかし，統計的に十分とはいえるサンプルの数ではなく，今後は，より多くのサンプルを用いての検証が必要である。また，子どもの問題行動がどの程度養育者の育児負担感を高めるか，他の要因も含め検討を行う必要がある。

2. 保育者の外在化問題行動評定と養育者の育児負担感の関連

保育者の外在化問題行動評定と養育者の育児負担感の関連をみた結果，養育者の場合と同様に保育者が「落ち着きがない」「多動である」「攻撃的である」と高く捉える子どもを持つ養育者は，低く捉える子どもを持つ養育者より育児負担感が高いことが確認された。保育者の評定項目は 4 項目である。しかし斉藤（2002）らの先行研究，1 の結果と同様の結果が得られたことは，保育者評定項目 4 項目の妥当性の高さを示していると考えられる。この結果より，保育者が「落ち着かない」等，子どもの外在化問題行動を高く評定している養育者は，育児に対する負担感が高い可能性があることが考えられる。本結果より保育者の見る子どもの姿から，育児に負担を感じている養育者に気づくことができるという示唆を得ることができる。金谷（2008）によると，保育現場における保護者支援の課題や要望を保育所へ調査したところ，問題を抱える保護者が増加していると答えた保育所は 97 %にも上り，また同時の保育者が保護者支援に不安感を抱いていることが報告されている。養育者のストレスを低減させる要因として，養育者がサポートされていると捉えること自体が育児に対する否定的感情の認知を低減させることが言われている（金岡ら，2002）。保育者に「気にかけてもらえている」と養育者が捉えること自体が，育児に対する負担感に影響を与えると考えられる。問題行動が多いと保育者が感じる子どもを持つ養育者に対して保育者がかける言葉は養育者の育児への負担感にとって大きな影響を与えることが考えられる。核家族化が進み，孤立しがちな家庭が多い中，保育園での保護者支援は養育者の持つ育児への負担感に配慮しながら関わっていくことが求められるだろう。今後の課題として，養育者から見た保育者の姿，保育者から養育者への関わりの実際について質的な面から検討し，育児負担感との関連を探ることが挙げられる。

3. 養育者と保育者の外在化問題行動の捉え方の関連

養育者と保育者の外在化問題行動の捉え方の関連を調べた結果，先行研究（中台ら，2002）と同様の結果が得られ，社会的望ましさを考慮するダミー項目を加える，項目数を半分にする，といった操作を行った場合においても同等の結果が得られることが明らかになった。特に

目に見える形での問題行動である外在化問題行動評定において，家庭や園といった異なる状況，異なる評定者においても子どもの問題行動に関連が見られる可能性が示唆された。また，項目ごとに，養育者と保育者との評定の関連を見た際に，両者で評定に関連がある項目は，「攻撃的な行動である」「多動である」「きまりや指示を守らない」の3項目であった。中台ら（2002）によると，園と家庭での子どもの問題行動には関連性が認められ，とくに外在化問題行動においては両場面で同じように示される行動であることが報告されている。しかし，外在化問題行動の中でも項目ごとに確認したところ，「不注意である」という項目は両者の評定間に有意な関係が見られず，両者の捉え方が一致しにくい項目である可能性が伺われる。

また，辻野（2008）は保育者と養育者の問題行動評定の差異点を比較した際，母の方が子どもの問題行動を高く評定する傾向があったと報告している。本研究では「攻撃的な行動」「多動である」「きまりや指示を守らないことがある」の3項目で養育者の方が子どもの問題行動を高く評定をしていた。これは，統計的に有意な結果は得られなかったが，養育者の方が保育者よりも子どもの問題行動を高く評定しやすい傾向にあることが示唆された。その要因として以下の点が考えられる。養育者は比較対象としての兄弟以外の存在がいないので，子どもの行動を問題と捉えてしまいやすい可能性が考えられる。また，感情的に距離がとりにくく，外在化問題行動などの行動が養育者の感情を引きだしやすいことが推察される。その他，子どもを育てた経験の少なさからその行動の程度や頻度が年齢に応じた発達段階と比べにくいこと考えられる。この点に関しては子どもの出生順位との関連等を含めて検討していく必要がある。一方，保育者の側面から考えると保育者は多くの子どもをみていて，子どもの発達に関する知識を有しているため，客観的に評定しやすい，といった可能性が考えられる。また，園と家庭という社会的な場面を考えた際に，園では集団に合わせ，時には我慢することなど社会的な行動を求められる。それに比べて家庭ではより自由に自分らしくいられる子どもの姿が養育者にとっては問題行動のように捉えられることも考えられるだろう。

一方，「不注意である」の項目は唯一保育者の評定が高い項目であった。これは先行研究とは異なる結果である。「不注意」という行動特性が園という集団場面においてより目立ちやすい行動であるからと考えられる。また，保育者が子どもの行動特性において着目しやすい行動であることが推察される。

4. 養育者と保育者の外在化問題行動評定の捉え方と育児負担感の関連

養育者と保育者の外在化問題行動の捉え方により，2つに群分けして育児負担感との関連を調べた。その結果，外在化問題行動を養育者・保育者ともに高く評定されている子どもを持つ養育者は育児負担感が高く，双方とも低く評定している子どもを持つ養育者は育児負担感が低いことが確認された。つまり保育者が子どもの行動に困難を感じている子どもを持つ養育者は同様に難しさを感じていて，育児に負担を感じている可能性が高い。また，子どもの問題行動について異なる捉え方をしている養育者と保育者は，お互い子どもの行動について理解が得られにくい状況にあると仮定すれば，コミュニケーションがうまくいかず，育児負担感が高まる可能性が考えられる。今後は，そのような場合の養育者・保育者双方の育児，仕事への負担感についての詳細な検討が必要であろう。

Ⅴ．おわりに

本研究の目的は，①育児負担感と養育者の子どもの問題行動の捉え方の関連を探る，②養育者，保育者の外在化問題行動の捉え方の関連と育児負担感との関連を探ること，であった。

本研究においては，まず定性的な評価が困難であると言われていた養育者による評価においても，先行研究と同様に外在化問題行動と育児負担感との関連を見ることができた。養育者がどのように子どもを捉えているのかということと，養育者の育児に対する負担感との関連を考えた際に，保育者による評定よりも養育者による評定の方がより養育者のストレスと問題行動とのつながりを捉えることができるのではないかと考えた。今回，養育者の子どもの捉え方と育児に対する負担感との関連について本研究はこの点において意味があると考えられるであろう。また保育者との評定の関連，育児負担感との関連においても先行研究と同様の結果が得られ，保育者が困難を感じる子どもの養育者は育児に対して負担感を感じている可能性が高いことが示唆された。その中で，「不注意である」といった項目において有意な関連が見られない行動特性があり，今後は問題行動だけではなく，子どもの良い面も含めた詳細な行動特性における評定のずれや子どもに対する捉え方の双方の特徴を検討する必要があるだろう。保育者は子どもに対してのサポートはもちろん，育児負担感の高い養育者を早期に発見し，支援が必要かどうかを見分けるといった視点を持つ必要がある。また，現在核家族化が進み，子どもと親を取り巻く環境はますます孤立している傾向にあるという（畑山，2010）。養育者と子どもを支えるもっとも身近な子育て

の専門家であり，支援者は保育者である。子育てを負担と捉えるだけではなく，肯定的な面を感じるためには，それ相応の余裕が必要だろう。その余裕を生み出す身近なパートナーとして保育者と養育者の関わりがより充実したものとなることを，今後の子育て支援において期待したい。

〈付　記〉
本論文は卒業論文を加筆・修正したものである。その際，調査に協力してくださった方々に心から感謝いたします。また，本論執筆にあたり多大なご指導をいただいた九州大学人間環境学府教授福留留美先生，同大学教授増田健太郎先生に深く感謝いたします。

引 用 文 献

Achenbach，T., & Edelbrock, C.（1978）: The classification of child psychology: A review and analysis of empirical efforts. Psychological Buleetin, **85**，1275-1301

Eccles, J.S. & Harold, R.D. 1993: Parent School involvement during the early adolescent years. Teacher Colledge Record, **94**（3），568-587

畑山みさ子（2010）：少子化対策としての子育て支援の現状と課題 宮城学院女子大学発達科学研究，**10**，63-67.

金岡　緑・藤田大輔（2002）：乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に対する否定的感情の関連性 厚生の指標，**49**（6），22-30.

金山元春・中台佐喜子・磯部美良・岡村寿代・佐藤正二・佐藤容子（2006）：幼児の問題行動の個人差を測定するための保育者評定尺度の開発 パーソナリティ研究，**14**（2），235-237.

Lazarus，R.S. & Smith，C.A.（1988）: Knowledge and appraisal in cognition-emotion relationship. Cognition and Emotion, **2**，281-300.

中嶋和夫・齋藤友介・岡田節子（1999）：母親の育児負担感に関する尺度化　厚生の指標 **46**（3），11-18.

中台佐喜子・金山元春（2002）：園と家庭における幼児の社会的スキル及び問題行動　乳幼児教育学研究，**11**，61-68.

齋藤友介（2000）：幼児の問題行動が母親の育児負担感におよぼす影響　東京保健科学学会誌，**3**（2），103-108.

竹林奈奈（1999）：問題行動　氏原　寛・近藤邦夫・東山紘久・山中康裕・小川捷之・鑪幹八郎・村山正治（編）カウンセリング辞典　ミネルヴァ書房 *p*, 612.

谷向みつえ（1999）：子どもの行動特性が母親のストレス及び不適切な関わりに及ぼす影響　人文論究，**48**（4），94-105.

種子田綾・桐野匡史・矢嶋裕樹・中嶋和夫（2004）：障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係　東京保健科学学会誌，**7**（2），79-87.

辻野順子・雄山真弓・田靡みつ子（2008）：子どもの問題行動と母親の愛着との関連性，並びに子どもの問題行動に対する母親評価と保育士評価の相違性について　関西女子短期大学紀要，**17**，1-9.

冨田久枝（2010）：保育現場における親支援とカウンセリングアプローチ―親育ちセミナーで実施した構成的グループエンカウンターの効果―鎌倉女子大学紀要，**17**，95-102.